

むかし、ひとりの男の人が、山道を歩いていました。主人にいつかつて、となり村まで手紙を届けに行くところでした。とちゅうで食べる昼ごはんを、手紙といっしょにふろしきに包んで、首にかけて歩いて行きました。

それを、きつねとたぬきとうさが見つけました。三匹は、

「あの昼ごはんをとって食べたいなあ」と相談しました。きつねが、

「まずは、うさぎどん、あんたの出番だ。あとは、おいらがうまくやるから」というと、うさは、

「よしきた」といって、出かけて行きました。

男の人が、峠を上って行くと、急に、やぶの中からうさがいつびき飛び出して、道の真ん中に、じつとうずくまりました。男の人は、

「こいつは、いいぞ。とつかまえてやろう」と、ぬき足さし足、うさにそうっと近づいていきました。そして、両手でちやつとつかまえようとすると、うさはびよんと飛んで、どンドン先へ走って行って、また道の真ん中にうずくまりました。男の人がまたそうっと近づいていって、ちやつとつかまえようとすると、うさは逃げ出し、少し先へ行って、道の真ん中にうずくまります。男の人は、

「よくよく人をばかにするうさぎだ。今度こそ逃がさんぞ」と思って、ふろしき包みを木の枝にかけておいて、うさを追いかけ始めました。

うさは、少し走ってはうずくまり、少し走ってはうずくまり、そんなことを何度もくり返してから、ふいっと、やぶの中に飛びこんでしまいました。あとは、男の人がいくら探しても、うさは見つかりませんでした。

さて、きつねは、男の人がふろしき包みを木の枝にかけたのを見ると、たぬきに、「さあ、たぬきどん、あんたの出番だ。昼ごはんをとって来てくれ」といいました。たぬきは、

「よしきた」といって、ふろしき包みを取って来ました。そこへ、うさが、
「ああくだびれた」といって、もどってきました。

三匹は、寄り集まって、いよいよ包みを開けてみました。中には、手紙と、大きなぎりめしがごろごろと五つも入っていました。

さて、三匹で五つのにぎりめしを、どうやって分ければいいでしょう。困っていると、きつねがいました。

「ははあ、分かったぞ。にぎりめしの分けかたは、この手紙に書いてあるに違いない」
きつねは、手紙を広げて、さもさも字を知っているふりをして、読み上げました。たぬきとうさぎは、感心して聞いていました。

「ふうむ。こう書いてあるぞ。うさぎひとつ、たぬきひとつ、あとはみんなきつね殿」
きつねは、おにぎりをうさぎにひとつやり、たぬきにひとつやって、あとの三つを、ひとりでぺろぺろと食べてしまいましたとさ。

おしまい

村上郁 再話

資料『甲斐昔話集』土橋里木編／郷土研究社